

教職大学院におけるクラウド型 e ポートフォリオの活用

ー統合支援システムとしての manaba folioー

武 沢 護^{*1}, 島崎綾太^{*2}
takezawa@waseda.jp

*1: 早稲田大学大学院教職研究科 *2: 朝日ネット KK

Key Words : e ポートフォリオ, 教員養成, 教職大学院

1. はじめに

教職大学院での課題として長期学校実習における指導・評価, 大学院生の教科指導力の向上のためのカリキュラム開発および教材作成支援がある。とりわけ, 実習期間中の学生の活動をどのように指導・評価するか, そしてまたこの実習期間中における授業案作成, 教材作成などに対する支援の体制をどのように構築するかは重要な課題である[1]。

そこで今回の取り組みでは e ポートフォリオ機能を含むクラウド型教育統合支援システム manaba folio (朝日ネット) を用いて長期実習の支援体制を整え, 年間を通して活用した。

さらには, この統合支援システムの初等中等教育への導入を視野に入れ, 教員養成における e ポートフォリオ活用の可能性ならびに課題を考察したい。

2. 大学院レベルの教員養成の方向性と問題点

教職大学院は2008年4月から設置され, 現在は25大学(国立19, 私立6), 入学定員815名, 教員就職率93%, 20都道府県で配置されており, 理論知と実践知を往還する探究的なカリキュラムのもとで展開されている。とりわけ, 現代的な教育課題である ICT 教育や特別支援教育, そして「学校における実習」を通して行う実践的活動が重要視されている。そして今後は地元の教育委員会と協力して全都道府県での配置を促し, 国立の教育養成系修士課程は原則として教職大学院へ移行の方向である[2]。

しかし, 現実の問題点としてこの実習を軸としたカリキュラムにおいて大学教員が実質的に指導に関わるような環境づくりが難しく, そしてさらに, そこでの成果(教材作成など)や教育実践研究(大学院での授業と学校実習を総括した振り返りや省察)への支援体制の確立が欠かせない。

3. 教員養成における統合支援システム利用の視点

本学では, CMS/LMS として全学的な情報基盤である Waseda-net CourseN@vi を使用している。教職研の学生もこのシステムに登録し, ささまざまな授業に活用している。そしてさらに, このシステムとして並行して担当の学生を manaba folio に登録し, 図1のように「ポートフォリオ」, 「コース」, 「コミュニティ」からなる統合的な環境を提供している。

機能名	対象	機能・役割
ポートフォリオ (公開, 非公開)	学生	・スケジュール管理 (実習や授業等) ・日々の実習記録 ・成果物 (教材や指導案) の蓄積 ・報告会などに向けての振り返り
	教員	・スケジュール管理 (実習校訪問等) ・授業記録の蓄積 ・レポート管理
コース	学生	・レポート提出 ・各掲示板での情報交換 ・相互学習や学びあい
	教員	・講座の管理 (年度別) ・レポート管理 (告知・回収等) ・掲示板管理 ・掲示板の活用 (添削指導や助言, 連絡)
コミュニティ	教員 学生	・授業以外の交流 (趣味など) など SNS 的な使い方 ・OB からの助言
管 理	教員	・ユーザー管理 (登録, 変更, 削除等) ・各種機能の管理 (各機能の作成, 削除) ・統計情報管理 (各種ログ)

図1: manaba folio の活用の実際

教員養成にこのような統合的な支援システムを活用する意図は主に二つある。まず一つは4で述べるように教職大学院での学生支援としての役割である。特に長期学校実習やその間の教材作成など大学と離れた場所で行う実習への支援そのものである。

もう一つは5で述べるように学生が近い将来教育現場で勤務した時を想定してのことである。すなわち, 初等

中等教育でのポートフォリオ機能を含む統合支援システムの活用である。

4. 長期学校実習等への支援

4-1 教職大学院での長期学校実習

本研究科のカリキュラムでの長期学校実習は2年間で実習Ⅰ(25日)、実習Ⅱ(10日)、実習Ⅲ(15日)と計50日にわたる連携協力校での実習を義務付けている。そこで、私が担当している学生(2012年度5名、2013年度6名、2014年9名)に対し、2012年度からクラウド型ポートフォリオ(eポートフォリオ)を実験的に導入し、この実習に対する指導・評価の改善を試みている。

長期実習の流れの概略は、

- ・事前指導：4月～5月、
- ・実習中指導：6月～12月、
- ・事後指導：12月～2月、

事前指導では実習の課題テーマを決定する個人調書の作成や模擬授業を実施する。eポートフォリオの使用は個人調書の添削指導に使うことが多い。

実習中(5月～12月)は、学生は大学側が用意した「個人実習ノート」を用いて日々の様子を記録する。また、大学教員は学生の実習期間中、連携協力校を実際に訪問指導し実習の進捗を把握する。そして、eポートフォリオはこの指導を補完する位置づけで活用している。また、「コミュニティ」はSNSの機能を持っており、学生達の自由な意見交換の場として、人気がある機能である。

事後指導では、学生同士の振りかえりや蓄積した教材の共有を行い、2月の最終報告会の原稿をまとめる。

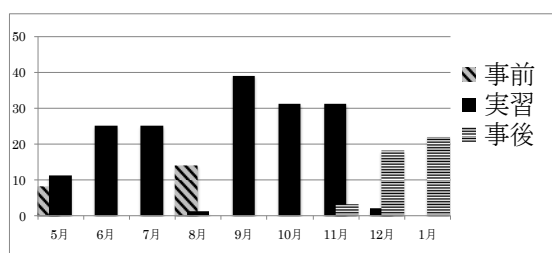


図2：システム(コース機能)へのアクセス状況

4-2 教材作成への支援やその他の活用

長期実習中では、この期間に作成した教材(指導案など)を蓄積し互いに共有している。このように学生や教員が互いに離れた箇所での活動を互いに共有することが可能になるのである。そして、教職大学院においてさまざまな場面での学習成果ならびに学習履歴を蓄積することは、大学院終了後の教員生活においても継続して教材コンテンツの蓄積・活用が可能になる。

5. 初等中等教育への導入の可能性

大学院を修了後、中等教育の教員になったときにこのようなシステムの活用を検討することは意味あることと考え、高等学校においてeポートフォリオを活用した授業を年間通して試みた。この取り組みは数式処理システム Mathematica (Wolfram Research Inc.) のプログラミングの授業において、e-text (e-notebook) 環境を構築して実施した実践である。

- ・LMS：Waseda-net CourseN@vi
- ・ポートフォリオ：CourseN@viのポートフォリオ機能
- ・使用教材：e-text環境を実現した電子ノート
- ・授業概要：Mathematicaのプログラミング
- ・対象生徒：高等学校3年
- ・授業スタイル：教科書(紙媒体)と電子媒体(e-text)
- ・評価方法：年間3つの課題作品の提出。

ここではeポートフォリオの活用と電子ノートとの親和性が高いことに着目し、生徒が毎回授業において作成する電子ノートを逐次保存することで、学習の成果を継続的に蓄積することが容易になり、自らのプログラミングの成果が可視化できた。このことはプログラミング学習には非常に効果的であると感じた。

6. 教育支援システム導入の成果と課題

このシステム導入により、

- ・指導の円滑化と評価への反映(指導と評価の改善)
 - ・教員、学生間コミュニケーションの活発化(個別指導)
 - ・学生同士の情報の共有(協働学習の推進)
- がもたらされたことは成果といえるだろう。しかし、
- ・学生による使用頻度の差
 - ・教材コンテンツの蓄積

に関してはまだ不十分と言わざるを得ない。また今後は初等中等教育でのさまざまな学習活動および評価活動に対し、このeポートフォリオを含む教育支援システムをどのように導入・活用していくのかも検討課題である。

大学院での養成を期待されている教員の人材像として、「新たな学び」を展開できる実践力、そして「新たな課題」に適応できる指導力を持つ教員が挙げられている。この実践を教員養成のひとつの可能性として考えている。

【参考文献】

- [1] 武沢護，島崎綾太：“教職大学院における長期学校実習に対する支援体制の試み”，PCカンファレンス2012.
- [2] 文部科学省：「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」，2013.10.15.